日隆聖人著『名目見聞』の一考察

大平宏龍

一、問題の所在

日隆聖人著『名目見聞』とは、言うまでもなく具さには『日蓮所立本門法華宗五時四教名目見聞』（以下、『見聞』と略称）といい、『十三問答抄』『法華天台両宗勝劣抄』等より後、『本門弘経抄』より前の著作と考えられている。(1)『見聞』は、日蓮教学を構成する基礎的名目を解説せられたものであるが、この中で、題号釈の部分である初の二巻（二帖）を『二帖抄』(2)、法華の下である五巻（五帖）を『五帖抄』と称して、従来、特別に研鑽せられ、宛も別個の著作の如き観があるほどである。これは『二帖抄』『五帖抄』が、聖人の著作の中でも比較的容易に理解が得られる為で、共に日隆教学の大綱を知る為にまず読むべきものとされているのも周知の事柄であろう。

ところで『見聞』について、信隆日秀上人の『両山歴譜写書継稿』では、いわゆる御聖教に関する記述の中で

右之内、名目見聞全十巻（或十三巻、或十六巻）開合異也（一九ウ～二〇ヲ）

と云い、この例からも知られるように普通に『見聞』は全十巻と云われている。然るに『見聞』中には、第十一、第十二等の調巻番号の付されたものがあり、直ちに全十巻とは考え難い上に、『見聞』の真蹟は、本興寺に格護されて現存しているのであるから、調巻の不同があって、それが開合の異であるというのも不審である。これは、とりたて

て問題とすべき事柄でもないように思われもするのであるが、然しこの疑問を解決しようとして、『見聞』の真蹟諸本の奥書等の異同やその構成を調査する時、『見聞』の成立に関して無視できない事実が判明するように考えられる。以下、調査の結果と、私見を記し、御叱正を御願いしたいと思う。

二、『見聞』の御真蹟について

御真蹟に散見する記事を一々抄録することは、煩雑ではあるが、必要なことと思われるので、以下、順を追って検討してゆくこととしたい。

まず、本興寺二十八世日顕上人（一六三二～一六九一）の『御聖教惣目録』（以下、『顕録』と略称）をみると[3]、以下の諸本のあることが知られ、それらはすべて本興寺に現存することが確認されている。『顕録』は、巻本目録と縫本目録より成るが、巻本目録の方の標題は記されていず、「御聖教惣目録」の標題の次に直ちに巻本の記事がある。然し、今は便宜上、両者を分別して、記することとする。（アルファベット文字と句読点、返り点等は筆者）

「巻本目録」中

一、名目見聞　十巻　(A)

一、名目見聞条箇　一巻　(B)

但七帖之条箇有レ之、余三帖条箇、中古紛失、合十一巻、右隆師御真筆

一、五帖抄　五巻　(C)

但第五巻初少不足、右隆師御真筆

一、五帖抄　全部　五巻　(D)

但代筆歟、前後所々隆師御筆之此五帖抄ハ発心者素桂[4]、予在住内寄ニ附之ニ、

「縫本目録」中

一、名目見聞　七帖　（E）

内、題号下　二帖　第一、第二

序下　四帖　第三、第五、第十、第十一、

三蔵教下　一帖　第十二、

合七帖、右隆師御真筆

以上であるが、現在、全巻複写はA～Cのみであり、D・Eは、遺憾ながら、本文に亘って精査するに至っていない。

さて、右より直ちに気づかれることは、御聖教中、御真筆の異本の存在するものとしては珍らしい例に属すること[5]、目録からは『名目見聞』と『五帖抄』とは別本の如くみえること、また『見聞』は通常、全十巻と云われるにも関わらず「第十一、第十二」等とあること、などである。以下、御真蹟を拝するのは、主としてこの調巻如何の問題を解決せんが為である。

㈠A～C本

まず条箇（B）では、『顕録』の注記の如く、第一（題号の下の第一）・第四・第十三の三帖分が欠落している。猶、その外に第六・七・八の三帖分もないが、これは『五帖抄』分に相当する（後に言及）故であり、『顕録』にも度外視したものであろう。中古の紛失分は仕方ないとして、問題は、調巻の順序を示す「第一」等が一度記されたものもすべて消去されていることであり、日隆聖人御真筆の文字・文章を後人が消去した事例はまず皆無とみてよいから、

これは隆師自身の意志による消去であると考えてよいであろう。但し、第十二巻相当の三蔵の下（七賢の下、三賢の下）には、当初より調巻番号がなく、また本文中の標題には存する所の「序の下」（第三・四・五・九・十・十一が含まれる。後に言及）の標示が一切ないことが注意される。

次に本文（A）における巻首・巻末の真筆の記事を抄録してみると、次の如くである。（丸括弧はすべて筆者又、「」は改行を示す）

（第一巻）（内題）日蓮所立本門法花宗五時四教名目見聞（以下、日蓮見乃至聞、と略記す）
題号下　二帖内第一」（巻末、同文）

（第二巻）（外題）日蓮宗名目見聞第二　題号下」
（内題）日蓮乃至見聞　題号下二帖内第二」（巻末、同文）

（第三巻）（外題）日蓮宗名目見聞第三」
（内題）日蓮乃至見聞　序下」化儀化法四教下」
（巻末）以下化儀化法四教下畢」次〻五時也下可書之」

（第四巻）（内題）日蓮乃至見聞　序下」五時下　末花厳下」
（巻末）以下花厳下畢」

（第五巻）（内題）日蓮乃至見聞　序下」阿含方等般若下」（巻末略）

（第九巻）（外題）日蓮宗名目見聞第九　序下」
（内題）日蓮乃至見聞　序下」涅槃下　末三乗下」
（巻末）涅槃経下　三乗下畢　次帖初二四門在之云云」

日蓮乃至見聞　序下」

（第十巻）（外題）日蓮宗名目見聞第十　序下」

（内題）日蓮乃至見聞　序下」四門三惑二諦三諦下」

（巻末）四門三惑二諦下畢」三諦下未畢此三諦次帖之初マテ書之云式　次帖初本性三諦事ト云式」

日蓮乃至見聞　序下」

（第十一巻）（内題）日蓮乃至見聞　序下」三諦下上帖末三諦事書初之云云　三身四土下」

（巻末）已上四土下畢」日蓮乃至見聞序下畢」

（第十二巻）（内題）日蓮乃至見聞」三蔵教下　上帖序下竟」　七賢下　三賢下」

（巻末）三蔵教下　七賢三賢下畢」次帖之初ハ　四善根下云式」　日蓮乃至見聞」

（第十三巻）（外題）三蔵四善根下」

（内題）日蓮乃至見聞」三蔵教下」四善根下」（巻末記事ナシ）

以上で注意されるのは、調巻番号が確認されるのは、第一・二・三・九・十のみであることである。但し、三と四、十と十一と十二は、連続していることが、巻末の記事等でわかる。内容上からも考えることができるが、これは、項を改めて考察したい。また、本文（A）では、条箇（B）になかった「序の下」の標示があり、且亦、題号の下二帖分を除いては、A本の内題・巻末に調巻番号がみられず、外題に示されているのみであることである。

扨て次に、五帖抄（C）について、同様の記事を整理してみると次のようになる。

（第一帖）（巻首、隆師筆条箇）（消去）第六」法花下

〃〃

（隆師）法花下

（他筆条箇末）本門法華宗五時四教名目見聞　法華下　五帖之内第一」（以下、本門法華乃至見聞、等と略記）
（本文初、隆師）第五時法花下　□□（消去、或は第六の二字か。猶、この左横に三字消去、□帖内か。）
（巻末、隆師）本門法花乃至見聞　法花下　五帖内第一」本興寺流述記）

（第二帖）（隆師）妙下」
（他筆、条箇末）本門法華乃至見聞　法華下　五帖内第二」
（巻末、隆師）日蓮乃至見聞　法花下　五帖内第二」本興寺流之述記」

（第三帖）（隆師）妙一字下」
（本文初、隆師）本門法花乃至見聞　法花下　五帖内第三」
（巻末、隆師）本門法花乃至見聞　法華下　五帖之内第三」本興支流之述記）

（第四帖）（外題、隆師）本門法花乃至見聞　法花下　五帖内第四」
（隆師）経一字下」
（本文初、隆師）本門法花乃至見聞、法花下　五帖内第四」
（巻末隆師）本門法花乃至見聞　法花下　五帖内第四」

（第五帖）（巻初中古に紛失の由、顕師の記事あり）
（巻末隆師）本門法花乃至見聞　五帖内第五」摂州尼崎本興寺述記」

以上より、『五帖抄』が『見聞』と別個の著作ではなく、『見聞』の一部をなす（法華の下）ことが確認できること、また当初は法華の下が第六巻よりはじまる筈であったことが知られ、従って第六～八の三巻がその予定の部分であったことが推量される。次に現在みられる如き『五帖抄』の調巻も隆師の意志によるものであることも確認できるので

ある。

㈡D本

次に『五帖抄』の異本のD本であるが、『顕録』に「但代筆歟、前後所々隆師御筆（後略）」とあるように、殆んどが他筆であるが、題号や本文の一部に隆師の手蹟がみられ、返り点・送り仮名などを附された所もある。これが日隆聖人の御真蹟本と同等の価値をもつものであることは言うまでもなく、C本に於て第五帖の初の部分が不足しているのであるが、それをこのD本によって補い得るのは誠に幸いである。

D本の奥書等をみると、これが本興寺の所有する所となる迄には、かなり紆余曲折のあった模様で、例せば、第一帖奥書を掲載すれば、

（隆師真筆）本興寺流之述記」

（他筆）　日仙花押」

（他筆）　持主日上」

（他筆）　当主沼津ノ中将」

（他筆）　此五帖抄者為ニ本能寺常在院日要一所持秘蔵之抄一而伝レ予以欲レ令ニ弘通一如レ意干レ時寛文第六丙午年八月十七日」感ニ得之一」本龍院印」(6)

（日顕筆）　此五帖抄寺外有レ之然処発心者素桂企ニ一字一書一以ニ世財一求ニ此抄一本興寺江奉ニ寄進一者也」貞享第三丙寅正月廿三日」日顕花押」(7)

とあることから、幾度も所有者が替ったことが知られる。右の「日仙」とは、或は本興寺・妙蓮寺に貫首となりながら遺言で歴世に加わらなかった日仙上人（金光院、一四七六～一五五八）の事かもしれない。(8)「日上」と「沼津ノ中将」

は『法華宗年表』にも関係記事がなく不明であり、後考に俟ちたい。また「本能寺常在院日要」も不明であるが、『年表』には嘉吉二年（一四四二）、本興寺僧常住院日要上人の塔頭本教院創立のことがみえる。同じ人物か否か興味のある所である。「本龍院」については「年表」の寛文三年（一六六三）の項に、妙蓮寺役僧の「本龍院」なる人物のことがみえる。同一人物である確証はないが、年代は合致するようである。即ちD本はこれらの人々の手を経て、日顕上人の代に本興寺へ戻ったので、その功労者は素桂なる人であるが、『年表』の索引にも名はみえず、経歴などは知られない。御聖教の中には、このような篤信者によって今日まで伝えられたもののあることを深く感銘させられるのである。

さて、D本に於て今の場合、最も興味ある事実は、次の記事である。即ち、第一帖の

（本文初、他筆）本門法花宗五時四教名目見聞　（消去）（この八字、隆師筆）法花下
〃　〃　五帖内第一

第五時法花下」

と、第四帖の

（本文初、隆師筆）本門法花宗五時四教名目見聞　法花下
五帖内第四

（本文中間、他筆）日蓮所立本門法花宗五時四教名目見聞　（この行消去）序下
〃〃〃

うか。即ち、両者の間に「法花の下」が「序の下」より独立したとみれば、この相異を自然に理解できるからである。更に両本の本文対校を期する所以である。

この場合、「序の下」とは、恐らく「三蔵教の下」以下（即ち、現存本の第十二、三帖分）に対する序の意味であろう事が推測せられるのではなかろうか。そうでなければ「序」の意味する所が不明である。「法華の下」が「序の下」の一部でなくなったのは、それがいわゆる五味主の法華の立場から記述された為に、「序の下」に含ませるのが不適当と考えられたこと、恐らくそれに関して当初の三帖が五帖となり、一見、別行本の如き形となったこととが、関係しているのであろう。

㈢E本

E本七冊は、いわば破本であり、殆んど全部が他筆であるけれども、表紙はすべて隆師の真蹟であり、調巻番号が明確に付せられている（真蹟、番号は『顕録』参照）点が重要である。猶また本文中に隆師の書き入れが少しずつ存し、これまたD本のC本に対する関係の如く、A本の前段階を示すものでないかと推察される。然し、これも、本文の対校を経なければ判定はできない。

㈣小結

以上の調査より次の事柄が考えられる。

一、『見聞』は現存本（A～E）に拠る限り、条箇共で全十六巻となっている事。

二、それは後世にそうした為ではなく、日隆聖人自身の意図によること。

三、『五帖抄』は、当初、第六・七・八の三巻分となる筈であったらしいこと。

四、従って『見聞』の本文は、それが完結した形であるか否かは別として、当初十三巻の予定であったらしいこ

と。

五、「法花の下」も、当初は「序の下」に含まれていたらしいこと。

六、C本五帖の奥書には「摂州尼崎本興寺述記」とあり、伝承の如くに、『見聞』は本興寺で述作されたと考えられること。

調巻に関しては、これで一往結論が得られたのであるが、更に『見聞』の成立の事情を内容上から考察する時、前項の中、三〜五の結論が裏づけられもするのである。よって次には、内容上の問題点を少しく考究してみたい。

三、『見聞』と『七帖見聞』

『見聞』を一読する時、直ちに気づかれることは、台家の諸名目見聞の中、『柏原七帖抄』と『四帖綱目抄』の名称があげられており、或場合には、台家の義の説明をそれらの書物に譲っていることである。然し従来、その事の意味する所を指摘されたことはなかったように思われるのである。ところが管見によれば、これは『見聞』成立の大きな契機をなすものであり、決して軽視すべき事柄ではないと考えられる。その理由の第一は、『見聞』の「方等之下、説時之相」（仏立教学院刊本　二〇五）に

私云、上件義勢諸天台宗名目見聞書分也、其中柏原七帖抄教観両義不レ乱故用レ之抜出記レ之、尤可レ見合之一式。

とあり、また「三惑ノ下、煩悩所知二障ノ事」（同上　三五一）の箇所では

委在二寂照坊七帖見聞一可レ見二合之一、為レ記二日蓮宗宗旨一綱目略レ之、此抄四帖綱目抄與二寂照坊七帖広見聞一以見二合之一綱目可二了知一、是則法門正路也、其外諸名目見聞多分法門邪路也、此見聞常談法門移二七帖抄一式。(9)

とあ

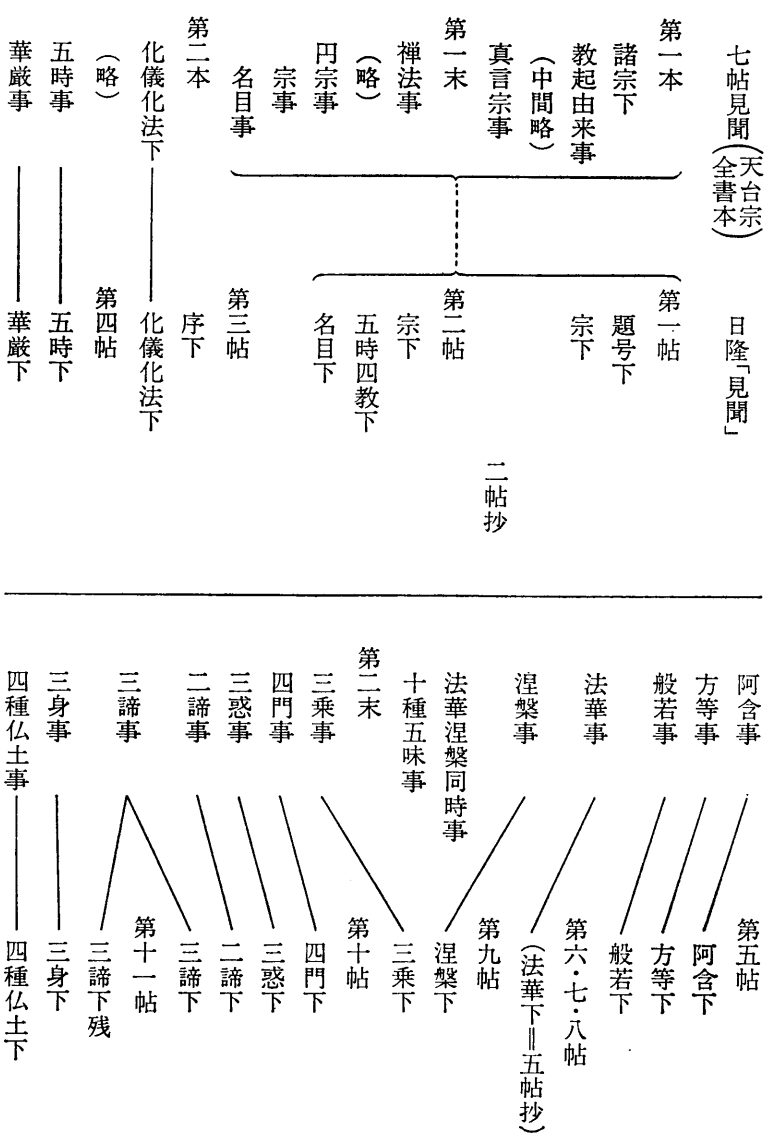
とあるのに注意すべきであり、この両文によっても『柏原七帖抄』と『四帖綱目抄』が重視せられているのは明らかである。ところで右の『柏原七帖抄』とは『柏原七帖見聞』『寂照坊七帖見聞』『寂照坊七帖広見聞』等と引用せられているが、それらは同一書を指すものと考えられ、柏原貞舜（一三三四～一四二二）の『七帖見聞』即ち『天台名目類聚鈔』であることが確認できる。その理由としては『柏原七帖抄』等の名称より常識的にも『天台名目類聚抄』のことと考えられ、また『見聞』の構成・内容がそれと密接な関係を有していること（後述）があげられる。[10] 次に『四帖綱目抄』とは、『昭和現存天台宗書籍綜合目録』『国書総目録』『仏書解説大辞典』等によれば、恐らく『綱目鈔』[11]のことであろう。該書は内題を『性宗名目私鈔』といい、別称を『天台綱目鈔』と云う。四巻で、什覚（一説に常陸国信太郡の人）の著であり、著作年は未詳であるが、寛永八年に刊行せられている。

扨て、前掲引用の両文よりして、次の事が明らかである。即ち『見聞』は、日蓮（所立の法華）宗の宗旨を顕さんが為に著述せられたものであって、決して台家の名目そのまゝを記したのではないこと、従って台家に論ずる所の細部に亘る議論（即ち綱目）を知ろうと思えば『七帖見聞』『四帖綱目抄』に当ってみるべき事を指示していること、その理由は、この両書は台家の諸名目見聞中、「法門の正路」を記するものである故で、その「正路」とは「教観両義不レ乱」という点にあること、等である。

この事は、また隆師が単に『七帖見聞』『綱目抄』を破邪顕正して宗祖の本義を明したものという如き単純な図式では解せられないものである事を示しているので、即ち当家教学の前提となるべき台家教学の義としては、両書の記述を認めている（無論、その間に取捨選択はある）ことをも意味している。日隆聖人教学の方法論は、宗祖御書の立場より天台三大部（及び妙楽の末註等）を用い、之に照して中古已来天台宗の法門に真偽邪正を分ち捨邪帰正するものとされる（弘全九五三三）。この線に沿って、先の両書は、隆師の意に適ったものとせられたのであるが、田村芳朗博士によれば

『七帖見聞』は、天台本覚思想の集大成の書とせられる。[12] とすれば、「教観両義不乱」の故に之を用うとせられた隆師の理解する所の天台教学とは如何なるものであったろうか。日隆聖人は、その著述の至る所で、中古天台の義を批判していられるが、それとの関係はどうであろうか。実は、隆師における天台宗研鑽の系譜もその実情も、未だ明確にされていないと言ってよいので、この点で、私は、日隆聖人が、『七帖見聞』と『四帖綱目鈔』を選択された点に寧ろ注目したいのである。隆師と貞舜（の学系）との間には、現在の所、密接な関係を示す資料はない。然し、台家教学に対する立場において、共通の部分があるとみられるわけであり、『七帖見聞』を検討することによって、隆師の台学に対する立場の解明に資することができると思われるのである。これは、今の主題より外れるので、別の機会を得て考えてみたい。

『七帖見聞』と『四帖綱目抄』に注意せられる第二の理由は、先にも少しく言及したが、両者、殊に『七帖見聞』と『見聞』とは、構成と文章表現の上に、密接な関係がみられるということである。[13] それは隆師自身も述べられる所であるけれども、単なる参照程度ではなく、恐らく隆師は『七帖見聞』を座右におき、それの叙述と構成とに示唆されつゝ『見聞』を著述せられたものと考えて、ほゞ誤りはないであろう。これを知る為に、煩雑ではあるが、両書の目次を対照させてみれば、次の如くである。


七帖見聞（天台宗全書本）
第一本
諸宗下
教起由来事
（中間略）
真言宗事
第一末
禅法事
（略）
円宗事
宗事
名目事
第二本
化儀化法下
（略）
五時事
華厳事
日隆「見聞」
第一帖
題号下
宗下
第二帖
宗下
五時四教下
名目下
第三帖
序下
化儀化法下
第四帖
五時下
華厳下
二帖抄
阿含事
方等事
般若事
法華事
涅槃事
法華涅槃同時事
十種五味事
第二末
三乗事
四門事
三惑事
二諦事
三諦事
三諦事
三身事
四種仏土事
第五帖
阿含下
方等下
般若下
第六・七・八帖
（法華下＝五帖抄）
第九帖
涅槃下
三乗下
第十帖
四門下
三惑下
二諦下
三諦下
第十一帖
三諦下残
三身下
四種仏土下

第三本　　第十二帖

三蔵教下 ―― 三蔵教下
声聞乗下
有門下 ―― 七賢下
七賢事 ―― 三賢下
三賢事 ―― 五停心下
五停心事 ―― 別想念処下
別想念処事 ―― 総想念処下
四十六心処事
四念処観事
総想念処事

第三末　　第十三帖

四善根事 ―― 四善根下
煖法事 ―― 煖法下
六因四縁事
頂法事 ―― 頂法下
忍法事 ―― 忍法下
世第一法事 ―― 世第一法下
第四本
七聖位事 ―― 七聖位下
見道事 ―― 見道下
（略）
修道事 ―― 修道下
（略）
六欲天事
第四末
第五本末　（略）
第六本末
第七

（了）

この巻は仏立教学院刊の『見聞』には欠落

この対照から直ちに知られるように、『見聞』の構成は、全く『七帖見聞』の構成に負うていると云ってよく、隆師が『七帖見聞』の項目を追いながら、『見聞』を記していかれたのは確かであろう。然るに、題号の下の二帖分は、やゝ趣きを異にしていて、『見聞』には、諸宗についての記述は、僅かしかみられない。逆に当宗の教義の大綱を直ちに記せられた形となっており、特に、彼此の祖である天台大師と日蓮大士との詳細なる徳行の比較をしている点は注目すべきものがある。また先にも述べた如く、「法華の下」は、当初第六・七・八巻となるべきであった事が、この対照を試みるとき、更に明瞭となるのである。ところが、その「法華の下」の内容は、やはり当家教相を直ちに述べる記述が主となって、『七帖見聞』の構想とは自から異ったものとなり、『五帖抄』として宛も別書の如き観を呈するものとなったと推量されるのである。

次に『七帖見聞』と『見聞』との内容に於て著しい類同のある事をみる為に一例を挙げれば、まず『七帖見聞』第二本の化儀化法事（天台宗全書二二八八a）に

義云、化儀者如来説教儀式也、去同別円華厳名二頓別円一方等般若号二漸別円一也、是即約二儀式方一故也、化法者正対レ機所レ説法門也、依レ之諦観四教儀云、頓等四教（以下略之）

とある部分に対応する箇所をみると、『見聞』第三帖、化儀化法四教下（仏立本六九）には、

一義云、化儀者釈尊説法儀式也、仍同別円華厳名二頓別円一方等般若成二漸別円一、爰知、約二儀式方計一聞、化法者、仏正対レ機説処法門也、依レ之四教儀云、頓等四教（以下略之）

とあって、「義」が「一義」に、「如来」が「釈尊」にという如き、字句の異はあるが、殆んど『七帖見聞』の文章を踏襲していることがわかる。これは特別によく似た箇所を選定した結果ではなく、ほんの一例にすぎない。よって隆師が「用レ之抜出記レ之」と云われた事は、決して一部分のことではなく、全体として云われたものである事が知られ

るので、かくすれば、『七帖見聞』が『見聞』成立に関して大変重要な役割を荷っていた事が首肯されるであろう。

次に考うべき事は、『見聞』は『七帖見聞』の第四本、修道の下に対応する部分で終っており、それは何故かという事であるが、序の下に続いてあるべき四教の下が、三蔵教の下の中途で終っているのは、何としても不思議である。凡そ日隆聖人の著作は、『三大部略大意抄』を除いてはすべて完結しているといってもよいので、是の如きは異例というべきである。これは、三蔵教が本門の朽木書（したえがきの意）であると御聖教中に度々言われるその事によるものか、或は、これ以下の事は『七帖見聞』等に譲られたものかとも考えられるが、いずれも確定的な証拠はない。その上、『見聞』第十三帖(14)の末尾をみると、

而仏滅後流通正法時国小乗権大乗也、次辰丹国

で終っており、文章としても完結していない。よってこれは何等かの事情で、以下を書き続けられることなく終ってしまった事を示すのであり、多分、隆師の関心が、『本門弘経抄』『宗要集』等の重要な御聖教述作の方へ移って、時間がとれなかったものであろうか。この故に現存本にみる限り、『見聞』は、未完の書と云わねばならぬわけであろう。

四、『見聞』の成立に関して

以上、御真蹟に散見する僅かな記事の総合に依って得られた結論は、『見聞』が『七帖見聞』と密接な関りを持ち乍ら成立したと考えられる事を考慮する時、一層明らかとなるので、『五帖抄』が当初、第六～八の三巻分となる筈であり、「序の下」の一部であったことは、『七帖見聞』の構成と対照する時、その構成順序と合致する訳であるし、そうした場合、『見聞』が修道の下で終っており、而も未完結である事も、一目瞭然となる。

故に、現存本でみる限り、『見聞』が条箇共で十六巻の著作であり、未完の著である事は動かし難い所であろう。そ

れならば、何故に、十巻、或は十三巻の説が存するのかという事になるが、まず十三巻説は、当初予定の巻数の事で、而も、真蹟に残る調巻番号を尊重すれば、そのような巻数であろうとする一往の説も成りたつ。然し、それには五帖抄（五巻）の去就が不明となるから、再往は、この数え方も決定的とはならなかったものであろう。

次に十巻説は、或は、最初隆師の意図として十巻の著作であったという伝承が存したのかもしれないが、現存の資料からは、そのような事実を示す記事は一切ない上に、何度も述べたように、却ってこの点では十三巻説となるべき記事が散見しているのであって、もし仮に、最初隆師が十巻とせられる意図があったとしても、親ら十三巻に変改せられた痕跡しか残っていないのであるから、これも、調巻の数としては不適当である。然し、これについて更に考えられる事は、顕師の修覆事業によって、『見聞』の現存本は、前掲資料（ABC）でも理解される如く、「名目見聞十巻」「名目見聞条箇一巻」「五帖抄五巻」等とされたことで、この顕師の記事によって、「名目見聞十巻」が熟字され、伝播されたのではないかという事である。因みに、隆師自身が『見聞』の全巻数をあげられた記事はないようであり、のみならず、これも明らかに、『五帖抄』は『見聞』の一部分を構成するのであるから、『五帖抄』と、それ以外を『名目見聞』として並記する如き記載は適切ではない。以上の如く考えられるとすれば、十、十三、十六の調巻の不同は開合の異ではなく、十、十三巻説は、現存本よりは成立しないといえよう。

さて、前来、些細な事に論及しすぎたきらいがあるが、調巻に対する疑問は、これで一往、解決が得られたように思うのである。そして、それと共に、『見聞』が『七帖見聞』を主たる契機として成立したという事も知られた訳であるが、この事は、日隆聖人の著作全体をみる時に、又一つの視点を与えるのではなかろうか。即ち、従来、隆師の主著は、『弘経抄』であり『宗要集』であると考えられて来た。それは、質・量共に最も妥当な見解なのであるが、隆師の著作のパターンを考える時、別な視点も生ずるという事である。

隆師の著作については、恩師株橋日涌先生によって初めて編年的展望が与えられたのであるが[15]、最初の著作である『御書文段』は別として、『十三問答抄』『私新抄』『四帖抄』は、日存・日道両聖人の口伝等によって、日隆教学を独自な仕方で構築されたものとみられるのに対して、その後の大部の著作の殆んどが、特定の書物、或はテーマに対してその教学体系を適用して解説されたものとみられるのである。即ち『弘経抄』は法華経とその解釈である天台三大部本末等を対象とし、『宗要集』は、天台の宗要集、殊に『類聚抄』[16]等を契機とし、『三大部略大意抄』は、天台三大部を対象としている。これを最も端的に示すものが、今の『見聞』であると考えられる。

この著作のパターンよりみるならば、『見聞』『弘経抄』『宗要集』『三大部略大意抄』は、『私新抄』を頂点とする初期の著述に示された聖人教学の体系の応用であり展開であるともみられるのではなかろうか。日隆聖人教学を動的な仕方で拝しようとする時、このような視点を設定する事は、又、一つの有効な手段となり得るものと思うのである。

五、あとがき

以上、粗雑な私見を述べたが、資料の観方や調査の不充分な点も多いと思う。また、思想的な問題に触れ得なかったのは遺憾であるが、それは別な機会に論及してみたい。大方の御批判を賜らばと念ずる次第である。

附記　小稿は、「日隆聖人著『名目見聞』について」と題して印度学仏教学研究第二四巻第一号に発表せる拙稿が、論証の部分を省略せざるを得なかったので、改稿補訂したものである。

〔註〕

(1)　株橋諦秀（日涌）先生「日隆聖人教学の序説」『桂林学叢』第四号四六頁。及び『法華宗名目見聞題号釈他三書』解説一五

一頁。

(2)「二帖抄」の称呼は、隆師自らのものである。『六即私記』上巻。皆久資料第五巻一三〇頁。

(3)『桂林学叢』第四号二三一頁以下。

(4)『桂林学叢』第四号二三六頁下段には「索桂」とあるも、「素桂」の誤植である。

(5)これに類するものとして、弘経抄重本（『顕録』前掲二三四頁下）及び直弟智本師筆『四帖抄』（同二三九上）等に注意すべきであろう。

(6)この一文の読みが明了でないが、今は以上の如く解した。御教示を乞いたい。

(7)顕師によって修覆された御聖教の殆んどすべてが貞享三年（一六八六）正月廿一、二、三日の奥書を有する。拙稿「本興寺二十八世日顕上人の御聖教修覆事業について」『宗門史談』創刊号五三頁参照。

(8)『法華宗年表』一五五八年の項参照。

(9)「委有ニ綱目抄・柏原七帖抄一、可レ見レ之云云、私云、柏原七帖見聞此下人間八苦、天上五衰事有レ之云云。」（同上五四四）等ともある。

(10)管見にふれた所では、貞舜については「天台名目類聚鈔序」（天台宗全書本による）に「西塔南尾宝園院院主、柏原成菩提院開基」とあり、諸書に通称として「柏原貞舜」と云われているが、「寂照坊」と云われた例は見当らぬようである。然るに成菩提院について『大日本地誌大系』近江国輿地志略第二巻（二四三b）には「天台宗、寂照山円乗寺成菩提院と号す」とある。之によれば、寂照坊とは、成菩提院の山号に由来するものであろうか。更に考えたい。

(11)『渋谷目録』には、一本の文安六年（一四四九）永珍の序を載せて「凡綱目者、一代事教大綱也、性宗名目私鈔者、上総国長南什覚法印集処疏矣」という。『綱目抄』について論及せる論文等は、管見に於ては見当らない。御教示を乞いたい。

(12)岩波日本思想大系『天台本覚論』解説「天台本覚思想概説」五四〇頁。

(13)大谷大学図書館の御厚意によって、同館所蔵の寛永八年刊行本を一見した所では『性宗名目私鈔』の構成（叙述順序）は、『七帖見聞』と全同ではないが大概一致している。因みに同館にはまた、文安三年仙波星埜山にて書写の一本も所蔵されている。日隆聖人当時の流行を示すものであろう。

(14)『見聞』の刊本としては、現在、全巻一具の本はなく、『二帖抄』は本宗刊の『法華宗名目見聞題号釈他三書』に、また『五

帖抄』は、仏立義書第三巻に、五帖抄以外の部分（二帖抄を含む）は、仏立教学院刊の『日蓮所立五時四教名目見聞』に収録されている。然るに、後者中には、『見聞』第十三帖目（四善根の下～修道の下）の一巻分を全く欠いている。この理由は、現行本よりは窺う事ができないのは遺憾である。

(15) 「日隆聖人教学の序説」前掲。

(16) 『開迹顕本宗要集』所引の『類聚抄』を、『天台名目類聚抄』と同一視する向きがあるが、私見では、政海の『宗要集類聚抄』ではないかと考える。後考に俟ちたい。

（'77・12・4）